

教 育 研 究 業 績 書 令和 7 年 4 月 1 日 氏 名 小笠原 眞弓		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学	幼児教育・保育、保育者養成、実習教育	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
① 学習効果促進のため学生一人ひとりに対する個別指導を大切にしている。	常時	学生一人ひとりが抱える課題に対して、共に考え、導いていくことをモットーとしている。その為、オフィスアワーを活用し授業時間外における個々への対応を常に心掛けている。
② 学外実習事前指導として1・2年生交流会を実施	平成 21 年 10 月～	学外実習（教育実習・保育実習）の事前学習の一環として1・2年生交流会を各実習前に実施している。実習園毎にグループを作り、園の特徴、実習準備、実習内容、記録等、実習を体験した上級生から下級生への情報提供および助言の場としている。この会の運営は2年生が行う。交流会は授業終了後の放課後に設定しているが、学生は双方ともに有意義な時間を過ごし関係を深める機会になっている。
③ 教育実習事前指導としての模擬保育の取り組み（2年生）	平成 22 年から毎年 5 月～6 月の実習開始まで	教育実習事前指導の一環として、学生主体の模擬保育を授業の中に取り入れた実践的学習を行っている。学生は保育者役、子ども役、観察者に分かれ模擬保育に参加、終了後それぞれの視点から意見交換を行い、学びを共有する。この取り組みを通して、指導計画案の立案や教材準備、教材研究の重要性を実感し、実習に対する意欲を高め、実習に臨むことができる。
④ 教育実習事後指導として個別面談を実施（1年生）	平成 22 年から毎年 11 月下旬～1 月	1 年教育実習終了後、空き時間や冬休みを利用して全員に個別面談を実施。実習園の評価を元に学生の自己評価、実習記録と照合しながら各自の課題を探り改善へと導き、次の実習に繋いでいる。この面談は個々の実態を知り、学生との関係を深める機会と捉え、実習指導には欠かせない取り組みと考えている。
⑤ 保育実習事後指導の一環として個別面談を実施（2年生）	平成 22 年から平成 31 年 12 月～1 月	全ての実習（教育・保育）を終えた学生一人ひとりと面談を行い、2 年間の学びを振り返るとともにこれからの方向性を示し、新たな課題を明確にしている。養成教育 2 年間の集大成と捉え一人ひとりにメッセージを送っている。

⑥ 和歌山市と連携し月一回子育て広場を開催	平成 22 年 5 月～	和歌山信愛女子短期大学「きょう育の和センター」の子育て支援事業の一つとして和歌山市と連携し月一回の子育て広場を開催。広場は和歌山市保育士の派遣を受けながらも、保育科1年生と保育科教員が中心となり運営。学生が親子の前で行う保育プログラムの事前指導、サポートを行っている。学生はこの活動を通して乳児期の子ども理解を深め、保護者とのコミュニケーションを経験し、地域貢献も果たしている。
⑦ 卒業研究Ⅱ「手作り人形劇の制作と上演」	平成 24 年から毎年 12 月	人形、脚本、小道具、音楽を手作りで制作した人形劇を保育現場や市民図書館で上演し、子ども達と交流を図り、子どもが本来持っている想像力や表現力を引き出す。この実践的活動を通して、学生の感性を高め、保育者に必要な表現力や工夫する力、協調性を身につけている。
⑧ 教科目「保育のこころ」（和歌山信愛女子短期大学独自）の一環として、一人の学生が3回（全日）、「現場体験」を経験する機会を企画、実施している。	平成 25 年から毎年 6 月～7 月	近隣の保育施設の協力を得て、入学後間もない時期に学生を保育現場に送り出し、子どもと関わる経験を通して子ども理解、保育職に対する意識を高め、授業内容の理解度が増すなど効果が得られている。また入学後、専門的学びの深さに自信をなくしていた者が、気持ちを立て直す機会ともなっている。
2 作成した教科書、教材 ① 和歌山信愛女子短期大学保育科の実習記録ファイルの作成 ② ③	平成 2 年 4 月～	教育実習・保育実習の為の実習記録ファイルを作成。実習の目的、実習方法の理解、心得等の要項をはじめ、学内ガイダンスの内容や実習園でのオリエンテーション、研究テーマ、毎日の実習記録を集約したもので、学生は二年間の学外実習の際活用し、自己成長の記録ともなっている。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 ① 和歌山信愛女子短期大学保育科学生による授業評価アンケート結果における評価 ②	平成 19 年 4 月～	和歌山信愛女子短期大学において、学期末に実施されている学生による授業評価アンケートによると、担当教科のすべての項目（授業の計画、内容、教員の教え方、授業の成果についての 13 項目）において本学全体、保育科の平均値より高い評価を得ることが出来ている。特に、授業内容は学生の興味を惹くものであり、授業に対する満足度は高いことから、授業の目標は概ね達成できていると理解している。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		

① 和歌山信愛女子短期大学内における2歳児クラスの研究保育	昭和51年4月～昭和59年3月まで	モンテッソーリ教育法に基づいて学内の研究室で週2回、2歳児保育を実践。子どもの発達過程を理解し、子どもがより良く育つための援助や関わり方を研究。また、保護者に対しても指導を行った。昭和57年より場所を本学の附属幼稚園に移行して幼稚園教諭と共に保育を行い、その後信愛幼稚園未就園児クラスとして継承された。
②		
5 その他 ① 保母資格 ② 幼稚園教諭二級普通免許状	昭和51年3月 昭和51年3月	第220号（和歌山信愛女子短期大学学長） め昭50幼二普第23号（和歌山県教育委員会）
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 ③ ④		
2 特許等 ① ②		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 ① ②		
4 その他 ① 国際モンテッソーリ協会承認証明書 ② 和歌山市子ども・子育て会議委員としての活動	昭和54年3月 平成25年7月～現在に至る	第1978-129号（京都モンテッソーリ教員養成コース） 1977年4月～1979年3月京都モンテッソーリ教員養成コースに通い、モンテッソーリ教育法の理論や実践方法を修得し、研究保育や授業に活用した。 平成24年8月「子ども・子育て支援法」に基づき、市民のニーズ調査や審議を重ねながら、平成27年4月「和歌山市子ども・子育て支援事業計画」を策定。その後、進捗状況の確認を行いながら次期計画に向け、より有益で実効性のある計画を作成する為に審議や検討を重ねる。 令和2年3月「第二期和歌山市子ども・子育て支援事業計画」（令和2年度～令和6年度）、令和7年3月「第三期和歌山市こども計画」（令和7年度～令和11年度）を策定した。現在は副委員長として会の運営に携わっている。

③ 和歌山市民生委員推薦会委員としての活動	平成 28 年 12 月 ～現在に至る	和歌山市民生委員・児童委員（主任児童委員）の推薦 和歌山市民生委員・児童委員（主任児童委員）選任基準要領により、各地区民生委員推薦会で選出された候補者について審議、市長に推薦を行う。現在は委員長として会をまとめている。
④ 和歌山県保育士等キャリアアップ研修「乳児保育」講師	平成 29 年 8 月～ 現在に至る	保育士等の処遇改善、および保育の専門知識の学び直しの為の研修会において「乳児保育」分野を担当。0～3 歳未満児の保育内容について講義を行っている。
⑤ 海南市子ども・子育て会議委員としての活動	令和 3 年 9 月～ 現在に至る	海南市子ども・子育て会議委員として「第 2 期海南市子ども・子育て支援事業計画」に関わる課題に対し審議を行い、「第 3 期海南市子ども・子育て支援事業計画」を策定した。 また本会では、委員長として会議の進行や各委員の意見をまとめる役割を担っている。
⑥ 和歌山県認可外保育施設等における重大事故検証委員会委員	令和 6 年 9 月～ 令和 7 年 2 月	令和 5 年 7 月に県内の認可外保育施設に於いて 0 歳 5 か月の乳児が死亡した事故について事故発生の事実把握、発生原因の分析等を行い、必要な再発防止策を検討した。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 2 3				
(学術論文) 1 母親の職場と同一の園に所属する子どもの事例 ―入園直後における幼児の集団適応と母親の役割葛藤―	共著	昭和58年2月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第23号 p. 40～p. 47	幼稚園あるいは保育所への入園の事態は幼児にとって今までの生活環境が一変するため、新しい環境に適応する努力が要請される。本報告は、その入園時の緊張状態にありながら、かつ、同一の園に母親が保育者として勤務している特殊な状況下におかれた幼児ならびに母親（保育者）に関するものであり、母子各々がいかにして緊張や葛藤を解消し、母親においては職場適応、子どもにおいては集団適応へと向かうのか、母子の適応過程を追い、これらの適応を促進する条件を探った。 共著者：小笠原眞弓、末田啓二 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能
2 集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響に関する追跡調査 ―1、調査開始時と4ヵ月後の状況―	単著	昭和59年2月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第24号 p. 60～p. 68	集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響を調べ、集団施設保育における望ましい保育内容を検討する為に、保育所に通所している保育所児グループ、家庭保育のみをうけている家庭児グループ、家庭保育を基盤に、週2回、短時間の集団保育をうけている中間児グループの追跡調査を行い、4ヵ月後の影響について検討した。その結果、4ヵ月間の集団施設保育では発達プロフィールを変化させるほどの影響はほとんど認められないが、領域別にはかなりの変化をもたらし、しかも、それは週2回短時間の集団施設保育でも生じることを結論として指摘することができた。
3 集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響に関する追跡調査 ―2、調査開始時から16ヵ月後までの変化―	単著	昭和60年2月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第25号 p. 47～p. 54	集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響を調べ、望ましい保育内容を検討する為に、保育所に通所している保育所児グループ、家庭保育のみをうけている家庭児グループ、家庭保育を基盤に、週2回、短時間の集団保育をうけている中間児グループの追跡調査を行い、中間児グループの集団施設保育の開始時から16ヵ月後までの変化について検討した。その結果、調査開始時から4ヵ月後

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
4 集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響	単著	昭和61年2月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第26号 p. 51～p. 57	ての対象児の年齢である2歳後半から3歳にかけては、それ以前に集団施設保育を受けていたかどうかにかかわらず、集団施設保育が子どもの発達に及ぼす影響は大きいことが指摘された。そして、この時期の集団施設保育は1週4時間程度であっても、大きな効果をもつことが示された。 集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響を調べ、保育所保育の積極的意義を見出すために、3歳児を対象に、乳幼児精神発達質問紙を用いて、保育所に通所している保育所グループと、集団施設保育の経験のない家庭児グループを比較し、通過率の差の大きい質問項目について検討した。その結果、子ども同士のかかわりによって習得されやすいと考えられる行動に関するもの、保育士の存在により習得が促進されると考えられる行動に関するものの通過率が高く、保育所保育には、家庭保育の不足面を補うといった消極的意義だけでなく、家庭保育では得られない積極的な意義があると考えられた。
5 箸についての研究(第6報)最近の学生の意識調査	共著	平成19年3月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第47号 p. 39～p. 45	箸に関する意識についてどのように変化しているかを知るために1991, 1999, 2006年の調査結果をもとに比較検討した。食事が洋風化、核家族化などにより箸に対する意識が年々低下している。また、箸を自己流に使いこなし自分の箸の持ち方が正しいと思い込んでいる学生が約半数いた。箸を使いにくいと感じている学生のうち75%が、箸を正しく持ちたいと思っている。保育現場の調査結果を参考にし、正しい箸の持ち方、使い方を幼児期など早期から教え、箸に対する関心を食事マナーとともに高めていくことが必要である。 共著者：小笠原眞弓、吉村正明 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能
6 保育科学生の養成期間中における意識の変化	共著	平成22年3月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第50号 p. 73～p. 80	本研究は、2007年度本学保育科入学生を対象に入学時と、2年生の10月に同意識調査を実施し、養成期間中における意識の変動を見ることを試みたものである。2年次は実習体験を全て終えた時点であり、意識の上にも現場に触れた影響が大きく表れた。残る半期の学生生活

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
7 保育所実習を通した学生の省察点	共著	平成22年3月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第50号 p. 25～p. 32	の中で、専門保育者としての意識のあり方を育てていかなければならない。今求められている保育者の能力、高い資質を目標に、学び続ける確かな専門保育者としての意識づくりの必要性を痛感している。 共著者：小笠原眞弓、森崎陽子、室みどり 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 保育士養成教育の中核をなす実習を充実させることは養成校として重要な課題である。事前には実習生として実りのある実習体験ができることを課題として一人ひとりの指導にあたり送り出す。事後は実習体験を通し、感得してきた内容から自らの実習を省察し、今後の課題を見つけ出す過程を、自信を失わず自ら志した専門保育士として学び続ける意識を確立させなければならぬ。本研究は、実習直後、実習生が受けとめた内容を取り上げ、指導の方向性を検討するものである。 共著者：小笠原眞弓、谷口恵理香、室みどり 本人担当部分：研究全般
8 施設実習の現状と今後の課題	共著	平成23年3月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第51号 p. 25～p. 36	本研究は「施設実習」を取り上げ、実習評価、学生の自己点検から事前指導の課題を求めるものである。平成 23 年度からの改正で保育実習における事前事後指導の単位数が改められる。従来苦慮してきた指導内容が十分に補われる見通しができたところである。本研究の結果を生かし、次年度から実施される「施設実習」への事前指導内容の充実を図りたいと考える。 共著者：小笠原眞弓、谷口恵理香 本人担当部分：研究全般
9 保育者養成における新入学生の意識の変遷ー保育科入学生の意識を踏まえ効果的な実習指導を目指すー	共著	平成25年3月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第53号 p. 51～p. 60	平成 20 年に幼稚園教育要領、保育所保育指針が改訂され、平成 21 年度から実践されている就学前教育は、今、教育の基本を踏まえ、求められる教育課題に向けた取り組みが展開されているところである。本学においても 2 年間という保育者養成期間の中で、今後の幼児教育の方向性を目指す保育者をいかに育てるかの大きな課題への対応が求められている。本研究は、実習指導の立場から、保

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
10 子育てサポート研究センター「子育て広場」平成 25 年度の取り組み	共著	平成26年3月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第 54 号 p. 15～p. 19	育科入学生を対象に入学時の保育学生の意識の実態を把握するとともに、5 年前に調査した 2007 年の入学生との比較検討を試み、加えて、1 年次の教育実習後の意識の変化を分析し、今後の実習指導の方向性を見出そうとするものである。 共著者：小笠原眞弓、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表 本研究は、2013 年 4 月から 8 月までの、子育てサポート研究センターとしての「子育て広場」の活動報告と今後の課題について検討したものである。 本学の「子育て広場」は、学生教育と地域貢献の双方を目指して行われ、序々に地域に浸透しつつある。今後、学生教育に関しては「広場」を学生自らが自己の学びとチャレンジする場として認識し、自主参加の学生を中心に、学生同士で学び合える環境を整えていくことと、親の育ちの支援として、大学の専門性を地域や保護者に発信していくための仕組みをどう構築するかが課題である。 共著者：小笠原眞弓、森下順子 本人担当部分：研究計画、結果と考察
11 保育学生の意識の変遷と体力の年次推移 ―40 年を振り返って―	共著	平成30年2月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第 59 号 p. 1～p. 9	保育者養成機関として、社会情勢の移り変わりによる保育の在り方の変化を捉え、保育学生の実態を把握し、対象に応じた教育を編成しなければその時代に求められる保育者を養成することはできない。本研究は、40 年に亘り本学保育科入学生に実施してきた「保育学生の意識調査」及び「体力診断テスト」を下にその変遷を辿り今後の養成の方向性を示唆する一資料としたいと考える。 共著者：小笠原眞弓、森崎陽子、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、考察、まとめ
12 未就園児（主に 2 歳児）の運動遊びについて ―和歌山市・新宮市の子育て支援講座から―	共著	平成31年3月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀要」第 60 号 p. 1～p. 6	本研究は、地域（和歌山県）の活性化に寄与することを目的とし、乳幼児期からの家庭における運動経験の必要性を促すために行った実践活動を報告するものである。 和歌山市、新宮市の子育て支援の場を通して、未就園児（主に 2 歳児）の保護者を対象に、乳幼児期の運動機能の特徴、運動の意義や遊びの環境づくり、関わり方を伝える講座を開設、同時に子ども達に 2 歳児の運動機能に配慮し考案し

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
				た遊びの提供を試みた。また、日常の生活行動の調査を実施し今後の改善点を見出す資料収集と分析を行った。 共著者：小笠原眞弓、森崎陽子、前島美保、金谷有希子 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能
(その他) 「学会発表」				
1 保育科学生の意識の変遷－1977・1997・2007年度の意識調査から－	－	平成20年9月	全国保育士養成協議会第47回研究大会（於函館国際ホテル・ロワジールホテル函館）	時代とともに変化しつつある学生の意識の実態を把握し、保育者養成の効果的あり方を求めるものである。社会の変化による若者が育つ環境も変わり、大学全入時代に移った現在、本学保育科入学生の意識に大きな変化が感じられる。教育目標を達成するために、受け入れた学生に対して、普遍的に変わることのない部分と、意識の変化を明確に把握しておかなければならない。本研究は、30年前から継続してきた保育学生の意識調査から保育者養成教育の充実に向け点検、反省、検討を試みた。 共同発表者：小笠原眞弓、室みどり、森崎陽子 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能
2 実習体験を通して育つ保育者としての意識－2年次の実習に向けての点検－	－	平成25年9月	全国保育士養成協議会第52回研究大会（於サンポートホール高松・かがわ国際会議場）	本稿は、実習指導担当の立場で現二年生の入学時の保育職などへの意識が一年次教育実習・保育実習を経てどのように変化しているかを明らかにし、二年次の仕上げとなる実習に向けて指導内容を検討工夫するものである。 共同発表者：小笠原眞弓、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
3 子育て広場の取り組みと地（知）の拠点整備事業COCへの展開	－	平成26年5月	日本保育学会第67回大会（於大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学）	本学「子育て広場」に参加した学生へのアンケート調査をもとに、子育て広場を通して学生自身が考える学びや課題について検討し、学生教育と子育て広場への接続について考察した。 共同発表者：小笠原眞弓、森下順子、森崎陽子、田原淑子、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
4 実習事前指導における模擬保育の取り組み－学生の	－	平成26年9月	全国保育士養成協議会第53回研	二年次教育実習・保育実習の事前指導の一環として実践している模擬保育について、学生のアンケート調査結果を踏ま

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
学びと責任実習への具体化ー			究大会 (於ホテルニューオータニ(福岡))	えて、模擬保育で得られる学生の学びを明確にし、責任実習への具体化を期待しながら、より効果的な実習指導を探ることを目的に検討・考察を行った。 共同発表者：小笠原眞弓、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
5 保育現場と養成校の協働による保育者養成ー現場体験の取り組みと本実習への繋がりー	ー	平成27年9月	全国保育養成協議会第54回研究大会 (於ロイトン札幌)	本学では、近隣の保育施設の協力を得て、入学後間もない時期に学生を保育現場に送り出し、子どもと関わる体験を通して、乳幼児の特性や援助の方法を学ぶことを目的とした「現場体験」を実施している。 本稿は、2年間の現場体験を振り返り、保育現場の体験が学生に与える影響と、本実習への繋がりを考察した。 共同発表者：小笠原眞弓、森崎陽子、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
6 実習事前指導における模擬保育の取り組み(2)ー学生の学びと責任実習への具体化ー	ー	平成28年5月	日本保育学会第69回研究大会 (於東京学芸大学・白梅学園大学)	前回の研究を省み、今回はより多くの学生が模擬保育に参加できるよう、方法を改善した。またその効果を実習後調査し、責任実習との連続性についても追求した。 その結果、実習前の模擬保育は多くの学びがあり、学生の自己課題を明確にし、実習に臨む意識の向上に効果があることが確認できた。また、グループで実践を試みた結果、教材開発や工夫の広がりも実証された。さらに、模擬保育で獲得した技術や知識を、責任実習において活用できたことも把握できた。 共同発表者：小笠原眞弓、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
7 保育者養成初期段階における現場体験の取り組みー本実習への繋がりー	ー	平成29年5月	日本保育学会第70回研究大会 (於川崎医療福祉大学)	平成27年度の研究に引き続き、今年度現場体験を振り返り、中間点、終了後の学生の意識の変容を確認し、本実習への繋がりに着目、その効果を明らかにした。学生は初期の段階の保育現場の体験であっても、子ども理解を深めるとともに、専門的気づきを得、保育職に対する意識を向上させたことが確認できた。また本実習との繋がりについても大変有効であることが改めて確認できた。 共同発表者：小笠原眞弓、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
8 新任保育者6ヵ月目の振り返りと自	ー	平成30年3月	日本保育者養成教育学	現在、国は待機児童問題の解消策として保育者確保の為に様々な処遇改善を実

小笠原 眞弓

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
己評価について			会第2回大会 (於共立女子大学)	施し、離職防止や養成校で学ぶ学生に対して保育施設への就職促進等の支援を図っている。しかしこのような政策だけで若手保育者が仕事を継続するとは言い難い。筆者らは予てより若手保育者の早期離職の要因は、保育者自身と職場の双方にあると考えてきた。本研究では、勤務半年を経過した新任保育者を対象に保育者自身の振り返り日常的に抱える不安や悩み、対処法について調査し、実情を把握したいと考えた。さらにその結果を受けて、養成期間中の教育内容及び卒業後の保育者育成についても検討する。 共同発表者：小笠原眞弓、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
9 実習事前指導における模擬保育の取り組み(3)ー学生の学びと責任実習への具体化ー	一	平成30年5月	日本保育学会第71回研究大会 (於宮城学院女子大学)	教育実習事前指導の一環として、模擬保育を実施し検討を重ねてきた。今回更に内容の充実を図る為に、主活動の分野の偏りを調整し、模擬保育を実践した。その結果を教育実習後の調査から確認、考察を行った。 共同発表者：小笠原眞弓、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
10 保育者養成における人形劇制作の意義に関する一考察	一	令和7年3月	日本保育者養成教育学会第9回 (於鎌倉女子大学)	保育学生による人形劇の制作について、制作の過程に保育者に必要なスキルや専門性が含まれていることを確認するとともに、活動を通して学生がどのような学習成果を獲得したのかを明らかにした。 劇作りの過程には、制作・言語・音楽表現等、多岐にわたる専門的なスキルが含まれ、さらに仲間との協力・協働からコミュニケーション能力やリーダーシップの向上が図られ、将来の同僚性や人間関係構築に繋がることが示唆された。また、実演を通して子ども理解が深まり、人形劇は3法令の5領域「表現」「言葉」の内容及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に関連することが理解できた。即ち、保育学生にとっての人形劇制作は、子ども理解、表現力、演技力、人間関係育成等、保育者に必要な専門性を身につける活動となることが確認された。 共同発表者：小笠原眞弓、金谷有希子 本人担当部分：研究全般、発表
「紙芝居」				
1 たいせつなくれよ	共	令和2年3月	和歌山県環	平成30年3月に策定した第二次和歌

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
ん			境生活部県民局県民生活課	山県消費者教育推進計画に基づき、幼児向け消費者教育教材の制作に関わり、紙芝居「たいせつなくれよん」を作成した。作品は和歌山県内の幼稚園、保育所、認定こども園の計 318 箇所へ配付され、子ども達が将来自立した消費者となる為に消費者教育に触れる機会として活用が期待される。 共同：小笠原眞弓、的場かおり、渡辺富美 本人担当部分：全般
「パンフレット」 1 家族そろって新入生	共	令和5年1月	公益社団法人和歌山県青少年育成協会	小学校に入学する子どもをもつ保護者が子どもと一緒に学んで育つ親になるためのパンフレット作成に編集員として関わった。出来上がったパンフレット「家族そろって新入生」は県内の小学校入学前の年長年齢児童の保護者全員に配布された。 共同制作者：小笠原眞弓、米澤好史、倉本健吾、橘美佐 本人担当部分：全般
2 家族そろって新入生	共	令和6年1月	公益社団法人和歌山県青少年育成協会	小学校に入学する子どもをもつ保護者が子どもと一緒に学んで育つ親になるためのパンフレット作成に編集員として関わった。出来上がったパンフレット「家族そろって新入生」は県内の小学校入学前の年長年齢児童の保護者全員に配布された。 共同制作者：小笠原眞弓、米澤好史、倉本健吾、橘美佐、岡山愛 本人担当部分：全般
3 もうすぐ小学生	共	令和7年1月	公益社団法人和歌山県青少年育成協会	小学校に入学するこどもを対象に、新しい環境にスムーズに適応できるよう入学前に家族と一緒に取り組む生活習慣等のチェックリストをこども目線で作成。完成したパンフレット「もうすぐ一年生」は県内の年長児童に配付された。 共同制作者：小笠原眞弓、米澤好史、玉置瞳、岡山愛、橘美佐 本人担当部分：全般